

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3670100035		
法人名	社会福祉法人 さわらび会		
事業所名	グループホーム野バラ		
所在地	徳島県徳島市名東町2丁目456番地		
自己評価作成日	平成29年11月30日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 <http://www.kaigokensaku.jp/>

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 徳島県社会福祉協議会
所在地	徳島県徳島市中昭和町1丁目2番地 県立総合福祉センター3階
訪問調査日	平成30年1月11日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者の願っている過ごし方やケアの希望を知るために利用者の思いを聴き取り、その人らしく穏やかに日常生活を送ることができるような環境作りに取り組んでいる。利用者の趣味や好んでしていることに合わせて個別と集団のレクリエーションができる機会をつくっている。音楽療法には全員が必ず参加して、季節感のある唄や昔から知っている唄を合唱して楽しんでいる。遠足・花見の他に喫茶店に行くことや個別の外出の機会もつくり、好きな食べ物を食べることもあり、会話を取り気分転換ができていく。地域の園児や学生の訪問があり、会話などを行うことで交流の機会がある。利用者や職員の間だけでなく家族・親類・友人などの入所前からの馴染みのある人とも関係を保ち、利用者の人生を尊重してその人らしく過ごして頂けるように日々接している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

管理者と職員は、利用者が楽しく暮らせる環境づくりに取り組んでる。利用者の趣味や好みに合わせて、音楽や書道、漢字、数字のパズル、体操等を行って、頭と体の活性化を図っている。同一法人の運営する併設の他サービス事業所の音楽ホールを利用し、季節の歌や懐かしい歌を全員で合唱している。リハーサルやレクリエーションの合間の利用者同士の会話や職員とのやり取りも利用者の楽しみとなっている。職員は、自然でさりげない声かけで誘導し、トイレでの排泄を支援している。事業所は、地域の小学生の下校時の見守りに参加しており、地域との関係を深めている。利用者の重度化や高齢化が進む中、医療連携体制を構築し、利用者や家族の意向に沿った対応に努めている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己 外部	項目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	先の理念にある利用者の「願い」を理解し、利用者と地域との関わりを明らかにしてできた理念が、ケアの精神の基礎と意識している。	事業所は、利用者が地域の中でその人らしく暮らし続けることを支援することを理念の柱としている。管理者と職員は、ミーティングにおいて理念がケアに反映されているかどうか振り返り、確認している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	秋祭り・敬老会などの季節的行事、地域の保育園児・小学生・中学生・高校生との交流、近隣の家族様や親しい方の面会などの交流の機会がある。	事業所は、地域の一員として、お祭りや敬老会等地域の行事、小学生の下校時安全確認の見守りに参加し交流を図っている。認知症ケアの専門性を活かして、地域の方たちからの相談も受けている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	行事への参加を通じて事業所での取り組みを理解してもらっている。家族様や施設見学に来た方の相談に応じることがある。職員が地域の方を招いた勉強会に出て、地域の方と話し合っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	行事や研修内容の報告を行い、利用者様と家族様・民生委員・地域包括支援センターの方々からの意見を聞き、ケアと事業所のサービス見直しと改善に努めている。	2か月に1回、運営推進会議を開催している。事業所からは行事や研修についての報告を行い、出席者からの質問に答えたり、意見交換を行ったりしている。事業所は、会議での意見等をサービスの質の向上に活かすよう努めている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市のながいき課の担当の方に実績と運営推進会議の報告をして、分からないことがあれば助言を頂いている。	日頃から、職員は、市の担当窓口を訪問し、事業所の取り組みや活動内容など各種報告を行っている。担当者からは、アドバイスをもらうなど協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	認知症の方の身体拘束防止についての勉強会で理解を深めている。ドアの施錠はなるべくしないようにしている。	事業所では、身体拘束や虐待の弊害について勉強会を実施し、職員への理解を図っている。職員は、見守りを徹底し、利用者一人ひとりの状態を把握することで、鍵をかけない自由で安全な暮らしを支援している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	主に認知症利用者の虐待の防止につながる勉強会を通じて、虐待の利用者の状態の理解と職員間でも話し合いやストレスを軽減するようにしている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護と成年後見制度については施設内研修で取り入れて、職員間で話し合い利用者の意思を受け止めたケアをしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	十分な説明を行い、理解・納得を得た上で契約している。改定があれば、利用者または家族様に説明を実施している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議では、なるべく利用者または家族様が出席できるようにしている。日常から利用者の言っていることから思いを受け止めている。	職員は、家族の訪問時に積極的に話しかけ、意見や要望などが出しやすい雰囲気づくりに努めている。利用者や家族の意見や要望は、運営面に反映させている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員会議や日頃の職員間の情報を伝達するときに、職員一人一人の意見・気付いたことなどを聞き反映される用になっている。	管理者はミーティングや個別面談を実施し、職員の意見を聞くようにしている。事業所では、職員が日頃の関わりから気づきやアイデアを運営に取り入れる仕組みを築いている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考課制度を取り入れ、職員の実績の把握と評価がされている。職員の面談により、一人一人に応じた話し合いがある。業務が就業時間内に終わるように取り組んでいる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	事業所内の毎月の勉強会により、認知症ケア・権利擁護などの勉強をすることができている。法人内研修や外部研修を受けることがあり、日頃のケア・緊急時の対応などの技術・知識を身につける機会となっている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	同じ法人のグループホームと唄の会などの交流を行い、問題点などについて解決に向けて意見をもらいサービスの向上に繋げている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	生活背景や心身の状態を把握し、本人・家族様から今後の希望や疑問などの聞き取りを行い、不安点を解消している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の不安・疑問に耳を傾けて利用者に対しての願いを受け止めてケアを実践していくことで、信頼関係が築けるようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	利用者の状態と願い・家族の思いを把握し、医療・他の介護サービスとの連携を含めた支援ができるようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	日常生活をしている中で、利用者の人生・過ごし方の希望や感情の変化にも気を配り、同じ家で過ごす家族のような信頼関係ができるようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族の思いの聞き取り・利用者の様子や変化のあったことの報告をして、家族に不安のないように信頼関係を築けるようにしている。手紙・電話で連絡・支援することは継続している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	外出をして住み慣れていた家や近所の様子を見る機会があり、馴染みの友人・知人とも会うこともできるようにしている。	事業所では、利用者のこれまでの生活歴を大切にしている。職員は、利用者の馴染みの理・美容院への外出を家族の協力を得るなどして支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者の感情と利用者同士の関係を理解し、なるべく気の合う利用者が近くで過ごせるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所して他の事業所に入所しても会いに行くなどして関わりを保つことができている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	常に本人の意思を確認し、利用者の思いや希望を尊重したケアを心がけている。聴き取りにくい利用者であっても、全職員で話し合い願いに適ったケアができるようにしている。	職員は、利用者との日頃の関わりを通じて、一人ひとりの思いや意向を把握するように努めている。職員は、利用者の言葉や表情から意向を推測している。意思の表出が困難な方は、家族から情報を得たりして、生活歴から利用者本位の視点で全職員で検討している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人・家族から利用者の暮らし方の希望や関心のあることを聴き取りをしたことを活かしてその人らしく馴染みのある生活ができるようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日常のケアの中で、身体の痛みや感情などの日々の変化に目を配り、認知症の状態にも変化があれば把握している。できなくなってきていてもできる場所を探し、全職員で共有していくようにしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者の状態が変わって行く中で本人・家族の願っていることを確認し、全職員の意見を出してケアの計画を検討している。また、医師・看護師から意見を得ることがある。	事業所では、本人の希望や家族の意見を反映し、全職員で意見交換やモニタリング、カンファレンスを行って介護計画を作成している。設定期間でのモニタリングを繰り返し行うとともに、本人の状態の変化や家族の要望に応じて、随時見直しを行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日常の様子に変化があったことなどを介護記録にとして残し、ケアに関して気付いたことなどを職員間で共有できるようにしている。また、介護計画の実施評価にも活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	健康面では訪問診療・訪問看護を定期的に受け、必要なときは病院・リハビリ施設への送迎・付き添いもしている。また、利用者の希望があれば、スーパーや美容院に行くときもある。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	家族の結婚式や馴染みの美容院に行くことがあれば送迎をしている。地域の保育園の園児から高校生と交流の機会がある。消防署の人が来て防災訓練をすることもある。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所前と入所後のかかりつけの病院について家族と確認をとり、他の病院を受診する必要がある場合は本人・家族様と話し合い受診できるようにしている。	多くの利用者が入居前から協力医療機関をかかりつけ医としている。専門医の受診の際には、職員が付き添いを行っている。事業所では、適切な医療を受けることができるように支援に努めている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回程度の看護師の訪問があり、バイタル測定や状態の観察をしている。状態の変化があるときは、相談をすることができる。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院前と入院時の利用者についての情報の交換をして、家族・かかりつけの医療機関との間で連絡・確認をしている。退院後の医療機関への情報伝達などができている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	職員の力量・他の利用者への影響を考慮し、体制づくりに取り組んでいる。重度化した利用者については、家族・医師・看護師と連絡をとり、安心して過ごせるようにしている。	事業所では、看取りの指針を作成し、早い段階で利用者や家族に重度化や終末期の対応について説明を行っている。管理者は、本人や家族の思い等状況の変化を常に意識している。また、家族や医療関係者と連携を図りながら支援できる体制を整えている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の対応について事業所内外で勉強をして、緊急災害時の避難訓練に合わせて緊急時の対応方法についての研修を受ける機会があった。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の防災訓練の実施があり事業所から職員・利用者が参加し、初期消火・避難誘導の訓練などを行っている。災害時の備蓄を備え、地域の避難場所となることについても話し合われている。	年2回、地域住民の参加や協力を得て、地震や津波等の災害を想定した訓練を行っている。災害発生に備えて、備蓄や備品を整備している。	

自己 外部	項目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人一人の個性を大切にし、個性に応じた言葉かけや対応をすることを心がけている。話し合いや勉強会を通じて、利用者への対応を振り返るようにしている。	職員は、利用者一人ひとりの尊厳の確保に留意している。本人の気持ちを汲み取り、さりげないケアを心がけている。職員同士で利用者に対しての言葉づかいや内容を確認し、常に改善に努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活の中で以前と変わってきていることなどに注意して、気付いたことがあれば利用者の願いを確認し、今後のケアについて話し合えるようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	自己決定ができる利用者は、希望を聴き利用者のペース・好みなども考慮している。自己決定ができない利用者は、過去の支援やその人らしさ・家族の希望などから、なるべく本人の希望に添えるようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	利用者の希望する美容院に行くことや、服などの買いたい物があるときは付き添い買い物に行くことができている。行事などに合う服などにも気を配り、毎日の身だしなみができるようにしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の盛り付けができる利用者には準備と一緒にできる機会をつくり、食事・料理について会話を取りながら楽しく食事をする事ができている。おやつと一緒にすることがある。	食事は、管理栄養士作成のメニューを併設のサービス事業所で作り、3食を職員が運んでいる。利用者と職員は同じテーブルを囲み、会話を楽しみながら同じ食事を摂っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎日の水分と食事の摂取量を記録し、摂取量が少なくなっていることがあれば、食べやすくする工夫をして少なくなり過ぎないようにしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、一人一人の状態に合わせて口腔ケアができるように見守り・介助ができている。磨き残しの確認や歯間ブラシの使用ができるようにもしている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	ろう便・失禁の多い利用者には個別の記録表を作り、清潔に排泄ができるように声かけ・見守り・介助をしている。排泄のタイミングを合わせて対応することで、なるべく布のパンツで過ごせるようにしている。	職員は、利用者一人ひとりの排泄パターンの把握に努めている。身体機能に応じてトイレで排泄することができるようさりげない誘導を行っている。失敗した場合でも本人が傷つかないように、配慮しながら手早く対応している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	寒天ゼリー・ヨーグルト・牛乳などを取り、水分の不足と適度な運動になることなどをして便秘の防止に努めている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	家庭的な浴室で、一人一人の入浴の好みや時間に合わせて入浴ができるようにしている。洗身・洗髪はADLに合わせて利用者に希望を聞きできるようにしている。	事業所では、午後の何時からでも入浴できるよう準備している。利用者の状況やその日の希望を聞いて入浴することができるように支援している。入浴を拒む方も、週2回は入浴できるよう、言葉かけやタイミングを工夫するなどしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人一人の日中の活動・歩行・外出などがあるので、適度に休息が取れるようにしている。夜間の安眠につながる日中の過ごし方ができるようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	利用者の薬の準備と服薬が確実にできるように、確認と確認用のシートにチェックをするようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家事に関わること、今まで趣味や好んでしていたことができる範囲ですることで、楽しみを感じることができるようにしている。季節に合った行事・年中行事にも参加することができる。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	施設の近辺にドライブ・買い物をするために外出することで気分転換や近所の方との挨拶などができている。遠足・食事などの機会には、なるべく利用者の希望に合ったところに外出ができるようにしている。	事業所では、利用者の希望する場所に出かけることができるよう支援している。季節ごとの花見や初詣、外食へと出かけている。買い物の支払いも利用者本人が行っている。出先で知人と会うと挨拶を交わすなどしており、利用者の楽しみとなっている。また、家族の協力を得て、孫の結婚式に出席するなど、個別の外出を支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者・家族の希望を聞き、お金の支払いなどをしなくても常にお金を持っていることができるようにしている。お金の支払いができる方は、買い物などをしたときに本、人が支払うようにしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	年賀状や手紙を書きたいという利用者があれば用意して、家族様などに送れるようにしている。電話をかけたいときには、かけたい人に電話をして話したいときに話せるようにしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用の空間には季節の花や利用者の作った作品を飾っている。居室にはカレンダーや利用者が縫った季節の花の塗り絵などを飾っている。	玄関ホールの壁面には、利用者と職員の共同制作の作品『鶴・亀・松竹梅』が飾っている。共用空間のソファは、利用者が落ち着いて会話できるスペースとなっており、居心地よく過ごすことができるよう工夫している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールが利用者の集う食堂・憩いの場としてあるために、利用者の関係に気を配り、座席・テーブルの位置を決めている。ソファがあり、ゆったりと会話ができるスペースとなっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人の希望・趣味が居室に取り入れることができるようにしている。入所前から使っていた家具や好みの飾り・写真などを置き、家庭の居室が思われる環境にしている。	各居室には、洗面台やトイレを設置している。臭いや清掃に気を配り、清潔を保っている。居室には、使い慣れた家具や家族の写真等を持ち込んでもらっており、それぞれが居心地よく過ごすことができる居室となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ホール・居室で利用者の安全に困ることなく歩行・移動ができるように、テーブルや椅子の配置を合わせて、ドアの目印をつけるなどしている。		